



## ブラジルへ渡った「三番叟」

中村 茂生 (なかむら しげお)

立教大学アジア地域研究所研究員

イベントで、一回目になる。今年、会場となったのはわたしのいる町だ。沿線九都市の婦人会や踊りの愛好会などによる、合わせて八〇ほどの演目があったなかで、会場となったこの町が芸能祭に用意した踊りが約三〇。これほどの数が可能になった背景には、最近婦人会に勢いがあるのと、もうひとつ、二人いる踊りの先生の存在があった。

### 移住地の村芝居

戦前ブラジルにやって来た日本人移民は、十分稼いだら日本に戻るつもりでいた。精神は常に遠い日本とつながっていた。移民生活は労働中心のものになりがちだった。それでも年月を経て、移民の数も増えて日本人集住地が形成されてくるようになるころには、生活を楽しもうという余裕もできてきたらしい。やがて演芸会なども開かれるようになり、日本で身に付け、ブラジルまで運んできた芸を互いに披露する機会ができた。移民を盛んに送り出した当時の日本の農山漁村は、村芝居の全盛期である。地域によっては神社の境内ごとに農村舞台があり、小さな村にも三味線弾きもあれば、浄瑠璃語りもいた。当然のように、移民とともに、芸も、三味線も、丸本もブラジルに渡って来ていた。

一九二八年、日本政府の肝煎りで開拓

されたこの町には、最初から地主として来た人が多い。契約労働者だった初期移民に比べ、生活に追われなかったせいか、当初から芸事が盛んであった。外ではまだ原野を伐採して焼き払った煙が立ち上るようなところで、ひよつとするとオンサ(豹)が遠吠えするような晩にも、義経千本桜に聞き入る人びとがいたのだ。

二人の先生はともに、この町を拠点に戦前から一九八〇年代まで活動した旅芝居の一座にいた人である。その一座を立ち上げたのは、この師匠であった一人の女性であった。女性の出身地である中国地方は地歌舞伎の盛んな地域である。子どもころから芝居は身近にあったはずだ。いつのころから芝居に魅せられ、複雑な家庭環境もあって、とうとう家を出て少女歌舞伎の一座に身を投じることになった。憎まれ役として人気を博したが、結婚をきっかけにブラジル渡航となり、この町に来了。しかし、耕地に入つたものの、病弱だった夫は十分働くことができなかった。むかしとつた杵柄というわけで、ブラジルで一家が生き抜くために選んだのが芝居だった。大当たりだった。

人気は、戦争をはさんで長く続いた。新年や入植祭の公演は町でおこない、旅に出ないときには踊りを教え、約三年かけて各地の日本人集住地をひとまわりしていた。サンパウロ州奥地に暮らした

### 日系人の芸能祭

サンパウロ州奥地は、かつて日本人移民の集住地がいくつもあったところで、今でも日本人会が活動している町が少なくない。それらの日本人会は、すでに廃線となった鉄道沿線ごとに連合会を作っており、わたしのいる町の日本人会は汎パウリスタ連合会に属している。列車が走らなくなって久しく、車を使えば

隣りの路線の町の方がはるかに近いにもかかわらず、日本人会同士のつきあいは依然として汎パウリスタ線を軸としている。

連合会の年間主催行事のなかに芸能祭がある。日本人移民一〇〇周年を二〇〇八年に迎えることもあり、ブラジル日系人社会では、日本文化の継承ということが盛んに言われるようになってきた。芸能祭は、日本の踊りを継承しようとい

お年寄りの多くは、今でもこの一座のことをよく記憶している。子どもころ、青年のころ、一座がやって来ることをどれほど心待ちにしたか、楽しい思い出として語ってくれる人がじつにたくさんいる。

しかしやがて移民のなかで世代が替わりはじめると、娯楽も多様になり、なにより芝居のことは通じなくなる。まず、日本時代からこだわりのあった歌舞伎ができなくなり、現代風の芝居やバレエ、映画などを組み合わせて興行したが、とうとう最後を迎え、女性も亡くなった。

### 「三番叟」復活上演に向けて

芸能祭の後半、二人の先生もそれぞれ舞台に上がった。するとそれまでと明らかに会場の空気が変わった。一座が解散してすいぶんになるが、子どもころから作り上げてきた、踊りからだと、人を引き込む力は衰えていない。客席を見ると、とくにこのころにもに憑かれたような眼差しで舞台を注視する観客の姿があった。異国で寄り添うように暮らす日本人移民たちが待ちわびたという一座の公演は、きつとこんな観客で一杯だったのだらう。

師匠であった女性のことを二人の先生から聞いたとき、一枚の写真を見せられた。先生方が子どもころ、「三番叟」



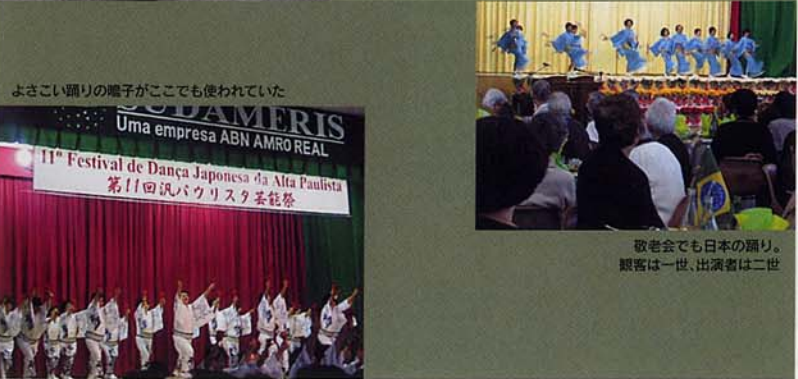
写真(白黒3点)の提供: [山中三郎記念パストス地域史料館蔵]

三番叟を復活させて 次の世代に伝えてほしい

1948年、どんお染・久松が 演じられたのだらう



ブラジル版、静御前と狐忠信の道行き



よさこい踊りの囃子がここでも使われていた  
Uma empresa ABN AMRO REAL  
11º Festival de Dança Japonesa da Alta Paulista  
第11回汎パウリスタ芸能祭

敬老会でも日本の踊り。 観客は一世、出演者は二世

を踊ったときの記念写真だ。地歌舞伎で、「三番叟」を伝えているところは少ない。おそらく写真の「三番叟」は、一座を始めた旅芸人の女性が、故郷か少女歌舞伎の舞台上で身につけ、弟子たちに仕込

んだものだ。いったいどんな「三番叟」なのだらう。ブラジルまで渡ってきた「三番叟」。残念ながら芸能祭の演目は、すべて現代風の踊りだ。わたしはむしろようにその「三番叟」が観たくなり、断られるの

を覚悟でせびとお願いしてみた。「まだ憶えています。踊れると思えます」と言う返事だった。次の正月には踊ってもらおうと、わたしは準備をはじめている。